リーザ・フリッチュの手記（2）

渡辺　肇
倉敷芸術科学大学院人間文化研究科

（2010年10月1日　受理）

（承前）

船で神戸に向かいました。だけど滞在したのは大阪でした。父はその地で多くの仕事をこなさなければなりませんでした。私たちが初めて動物園を訪れたのもそこでした。鉄道で長崎に向かいました。そこから下関を経由して連絡船で朝鮮に向かいました。朝鮮への航海については残念ながらあまり多くは覚えて居りません。旅の初めに茶碗と急須を借りると、茶葉と湯をいつも入れて貰えた事と、冷飯、野菜、肉？か魚が入った美味しい折箱弁当をどの駅でも買えた事と、上の方がくっついていて二つに割らねばならない箸[1]の事、だけは覚えていますが。

奉天では我が家の友マルクス宅に逗留（とうりゅう）しました。（彼は我々の廬林（ルーリン）の家を建築したのです。）この地で私たちはシベリア横断旅行の必需品を買入れたのです。なかんずくリンゴを買入れました。（両親と私には1日3個、妹のエーファと弟のヨッヘンには1日2個ずつです。）その他に、耳が凍傷にかからない様に暖かい襟巻を買いました。私たちはそれまでにも既に氷点下30℃を体験していました。当時、私は若い人むけの髪形をしていましたので私の両耳は特に寒気に対して露出していたのです。父は耳覆（みみおおい）を付けていました。食料を仕入れなくてはなりませんでした。と言うのはこの度はお金を節約する為に私たちは3等車で行ったからです。毎朝、毎夕、自分で食物を準備しなければならなかったのです。昼食は2人分の完全食事券を買っていましたので食料車に行きましたが、その2人前の食料は私たち5人に充分であったからです。飲物はそれに含まれていました。シベリア横断列車では私たちは4人用の車室を使用しました。父は隣の車室に寝台一つを確保していました。父の車室は時々父一人となりました。その時は素敵でした。父の車室が私たちの遊び場所となったからです。母はうまく準備していました。スケッチ・ブックと色鉛筆を持っていました。紙製のクリスマス・プレゼント用包装紐（ひも）を複写する為にです。その他に組立人形用の本も持っていました。エーファはトランクの名札を付ける為の針金（はりがね）と綿を用いて人形の家族を組立ました。スケッチ・ブックと紐（ひも）でカスパー劇場が出来ました。それで私たちは楽しく遊べたのです。車室の中で一日中上段ベッドを下にたたみ、非常に薄っぺらなマットレスを下段ベッドに重ねて敷いたのです。

父の車室に同室の乗客がいる場合は私たちの車室の上段のベッドは畳まないで、4人はそれぞれのベッドに横たわったのです。

3等車には1等車の様に洗面室が有りませんでしたので、乗客総ては客車の前後にある便所兼用の洗面室を使用出来ました。母は朝5時にはすでに起きていて、クレゾール消毒液で消毒しました。私たち5人はある程度まあまあ清潔にしている事が出来たのです。誰か他の乗客がその間にせかしてくる事が無かったからです。

およそ2時間ごとに、駅が近づいて来ると私たちは厚着をして寒気の中で足踏をしたのです。機関車はその間に、燃料用の新しい白樺の割木と罐(かま)の為の水を補給されたのです。

個々の客車は車掌(ブロードニック)が褐炭(かったん)を燃やして暖房しました。それにも拘(かかわ)らず窓は氷の結晶で覆われ、私たちは景色を見る事が全く出来ませんでした。

父と母は、二重窓ガラスの内側の窓を下して、雪の結晶を強いアルコールの火で溶かす事を思いつきました。母はガラスにグリセリンを塗って、再び凍結しない様にしたのだと思います。我々の車室の隣人たちはとても良い人たちでしたが、私たちの窓が氷結していないのを見て驚いていたと父が言って居りました。私たちは5人一緒だったでしょうし、声を潜めて話していたでしょうから、その様に行ったのです。これらの隣人たちと両親はよく話をしていました。彼らは他の多くのロシア人と同様にドイツ語を上手に話しましたし、その中の1人はバラライカを持参していて、上手に演奏していました。

クリスマスにはその時ハノーファーに住んでいた祖父母のシュラウベ家で過ごしました。1928年の祖父の年金生活開始からは祖父母はハノーファーに引越していたからです。

それから1932年1月にエーファと私はポツダム郊外のヘルマンスヴェーダーにあった寄宿学校に行きました。寄宿学校は半島に位置していたのですが、ユダヤ人墓地があったので島の様になっていて、テンプリン湖に付出ていました。テンプリン湖は反対側がハーフェル川に接していました。深い緑に包まれ、個々の家が一部は馬蹄形になって並んでいました。それらの家屋は総て樹木の名前が付けられていました。私が在学した4年の間にブナの家、マロニエの家、菩提樹の家、楡(にれ)の家、に住んだのです。この島はそれ自体小さな国家でした。寄宿舎の他に、教会や、寮母館、病院、教師宿舎、洗濯所、それから勿論の事ですが、学校、それから養老院と墓地までありました。

揺籠(ゆりかご)から墓場までの全生涯をそこで過ごす事も出来たでしょう。ヘルマンスヴェーダーは病院・養老院を併設する新教の婦人社会奉仕員養成所の一つで、カイザーヴェアター連盟に所属していました。

しかし、さらに語り続ける前に今、支那の正月について報告しなければなりません。それはいつも1月の終わりから2月の半ばの間に来ました。支那人が太陰暦を用いていた事に起因したのです。その頃は毎年4日間祝ったのです。使用人たちも順番に1日の休暇を貰ったのです。また、休暇を貰えない場合でもこの日々には何らかの配慮をして貰えたのです。私たちの阿媽(あま)は、私たちが眠っている内に、枕の下にピーナッツや大豆の御菓子やほかの甘い御菓子類を入れたボール箱を忍ばせてくれました。これは私たちに所属していたのです。ところで、この阿媽はヨッヘンの誕生（1925年）から1937年（？）まで私たち

のところにいたのです。時の流れのなかで彼女は私たち子供を彼女の親戚や友人たちの連れて行く事が許されました。それから、支那人街へもです。租界と対比的な支那人街にですよ。もし母が支那人街で食物を食べたと知ったら、怒髪天を突いた事でしょう。しかし私たちは何か悪いものを得た事など無かったのです。それが支那の正月であったか否かはもはや覚えていません。支那人たちが終わりが無いほど長い龍を用いて街中を行列するのです。いつも美しい光景でした。私たちは我家のヴェランダから良く見る事が出来ました。同様にもっと後の季節には揚子江でのドラゴン・ボート競走があったのです。

大きな見ものは葬儀と婚姻でした。

月並な楽団と銅鑼とトランペット等の騒音が聞こえてくると、師匠は丁稚にその騒音がいったい何であるのかを尋ねるのです。見えなければ分からないとの答えが来るのです。その様であったのです。楽団はドイツの行進曲を好んで演奏しましたが、いつも音程が合っていた訳ではありません。

私たちの阿媽について、彼女が結婚していた事を言わねばなりません。彼女の夫のところには給仕１人と裁縫職人である息子１人がいました。彼女にも勿論息子がいた訳です。わたしたちはこの２人と知合いになる事はありませんでした。彼女の家族生活がどの様に営まれているのかは、私には謎であったのです。というのは、彼女が毎晩外出するのかどうかが分かりませんでした。彼女はいわゆる遊戯室兼アイロン室で寝ていて、その事でいつも、私たちの近くにいたからです。ずっと後で、私たちが大きくなっていた時に、彼女は家事使用人地区で１室を与えられました。そこで彼女は自炊したのです。我が家の料理人シャンが他の人にも料理をしました。この食事の請求書を彼女は全く了承しなかったのです。

ところで、食事を終えたら私たちが席を立っても良いとされていた、唯一の食事は朝食でした。それは日曜日の事であったに違いありません。というのは、日曜日でなければ直ぐに学校へ出かけていたに違いないからです。食卓に残る代わりに、その後、料理人のシャンや、給仕や苦力のところに行って穏便に振舞ました。しかし、その事を両親は知悉していました。

さて又ヘルマンスヴェーダーに戻りましょう。私は５年級に編入されました。漢口では学校が９月に始まるのに、ドイツでは復活祭に始まったからです。しかし、それは何の意味もありません。というのは、支那では３年間通学し、私はクラスで一番若かったからです。最初の授業の日に他の生徒たちは、担任の先生が新しい生徒が１人来た事を言わなかった事で冗談を言いました。それは暫くの間続きました。先生がそれに気付くまでです。私の同級生たちは私が支那から来たと聞いていたので、「ああ、それで。」私が他の生徒とは違うのだと思っていたからです。

私たちの宿舎の、１室に６～10ベッドがある寝室で眠りました。朝は７時に起こされました。それから駆足で２つある洗面室に向かいました。そこには長い洗面台がありました。

朝食の前にベッドを整えました。全部のベッドがきっちりと整っているかも検査されたのです。その後、私たちが大人になるとベッドの端に洗面台を貰いました。入浴は週1回でした。浴槽は地下の2部屋に2個づつでした。つまり、その家に住んでいた私たち50名に4個しかなかったのです。トイレにはまだトイレット・ペーパーは無く、小さく切断された新聞紙が備えられていました。寝室は2階に、自習室、食堂、寮母室は1階にありました。その他にまだ2部屋があり、それぞれ1台のラジオ（フォルクス・エンペンガー[2]）がありました。私はそのラジオでエドワード8世の退位を聴いたのです。自習室には1人1人に机が1個づつ与えられていました。机の整頓は私たちが自由に致しました。筆記用具や、教科書などをしまっておく戸棚もありました。これらは常に几帳面に整頓されていなければなりませんでした。私には非常に苦痛でした。整頓は上手に出来たのですが、直ぐまた乱雑になってしまうからです。ある寮母の時には、私たちが現在ジョギングと呼ぶ様な持久走を行いました。夏にはみんな泳ぎに行くのが好きでした。この島には専用の水浴場がありました。そこから時々ハーフェル川まで往復したのです。そこでも私は休みなしで1時間泳ぎ通したのです。注意しなければならなかったのはそこを通り過ぎるハーフェル川の蒸気船でした。朝食の後みんながそれぞれの当番、つまり、花に水を注ぐ事や、テーブル・カヴァーを取り外す事などを果たしてから、学校棟に向かいました。大講義室で礼拝を行いました。礼拝は通常朝食の前にも食堂で行っていたのですが。学校棟で私たちはポツダムやカプートの街から通学している寮外生と合流しました

私は年長になった時（14歳？）漕艇チームに加わりました。私たちは楽しい時間を長時間、水上で過ごしました。

マッケンゼン元帥は50歳（？）[3]の誕生日に驃騎兵の軍服を着用して私たちを訪問しました。元帥はホーフバウアー財団の創設者ヘルマンスヴェーダーと親交があったからです。創設者たちはもはや生存してはいなかったのですが。私たち漕艇部員は分列行進をした後に青いズボンと白いシャツを着用したまま、隊列を組んで整列しました。この老元帥は私たちを閲兵しました。私の隣に立っていた友人の前に立止まり、彼女のお下げ髪を掴み、「しかし髪を切落してはいけません。頂点は私の名前をつけた漕艇の命名式なんですから。」と言いました。夕方には島の突端に完成した野外劇場の竣工式でした。最上級のクラスが「真夏の夜の夢」[4]を上演しました。この劇場は実に多大なる土を必要としましたので、私たち全員が一緒に働いたのです。

図1．驃騎兵の軍服を着用したマッケンゼン元帥

長い休憩時間の際には寮外生たちは校庭でバター付パンを食べましたが、私たち寮生はそれぞれの寮に帰り、私は今でもありありと覚えていますが、台所で第2の朝食を食べた

のです。

週末には月に２回外出できました。たいていの寮生は自宅に帰ったのですが、私は西ヴスター・フェルデに住んでいた、母の友人のエリー・トレおばさんのところに行きました。エリーおばさんは昔、母の家庭教師をやっていたのです。年齢の差はそんなに大きくは無かったので友人関係が出来たのです。

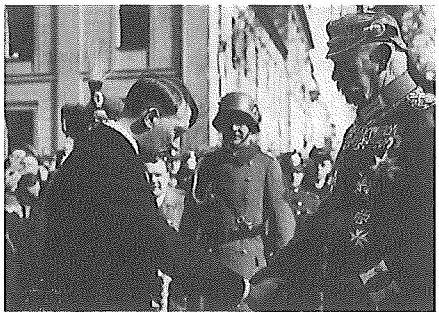

図２．ポツダムの日．ヒンデンブルク大統領（右）とヒトラー首相（左）

図３．ナチス幹部達　前列左からヒトラー、ゲーリング、ゲッベルス、ヘス

権力を掌握したヒトラーを周縁で体験しました。1933年３月21日ドイツ帝国大統領のヒンデンブルク元帥とヒトラーが衛戍教会で会った、「ポツダムの日[5]」に私たちは道の両側に起立していたのです。白髪の元帥は私たちの前を２度通過したので良く見えました。ヒトラーを初めて見たのは、寮生たちとベルリンに行った夜に、旧首相官邸のバルコニーでゲーリングやゲッベルスと一緒にいたところでです。ヒトラーに栄誉を示すためのタイマツ行列には大きな印象を受けました。私たち子供はその当時には感激したものです。しかし、後になると気持ちが離れたのです。私はBDM（ドイツ女子青年同盟）の下部組織少女団（ユンダメーデル）に加盟しようとしたのですが団員証を貰う前に失望して退団したのです。私は上海の病院で働く為に必要であった労働戦線以外の組織には加入しませんでした。

さてまたヘルマンスヴェーダーの事を御話しましょう。1933年の春に母は漢口からやって来て、妹のエーファを家に連れて帰りました。母は私が同行して帰るかどうかを私に任せました。私はいずれにしろ１年後には再びドイツに戻らねばなりませんでした。漢口でのドイツ人学校には後１年分の課程しかなかったからです。私はドイツの寄宿学校に馴染んだところでしたので、まずはドイツで学校を終えたいと思いました。ギムナジウム（9年制の中等教育機関）の、現在では中等教育修了資格と呼ばれる、ウンターゼクンダ（第6学年）を修了したいと思ったのです。それで私は３年間を１人ぼっちでドイツに留まったのです。私の祖父母が私の後見人でした。休暇の時は祖父母のところかポンメルンに住んでいた父の兄弟のところで過ごしました。１回だけですがノルデナイに住んでいる、祖母の弟のパウル・シリヒト叔父さんのところで過ごしました。それらは楽しい日々でした。私たちはしばしばヘルマンスヴェーダー島からサンスーシ公園も訪れたのです。サンスーシ宮殿や他の宮殿も、勿論の事ですが、見物したのです。冬になるとテンプリン湖でアイス・スケートが出来る様になるのを待ちかねたものです。そして、授業の後の午後に私た

ちは氷上を滑りまくったものでした。ハーフェル川が完全には氷結しないので、渡し船で対岸に行く事が出来ました。しかし、ある冬は非常に寒かったので、この渡し船は操業停止となりました。そして、カプートまで氷上を歩いて行く事が出来ました。テンプリン湖はそんなにも厚く凍結していたのです。

重点が置かれていた待降節の時節は楽しいものでした。クリスマスには私たちは一緒にいなかったからです。第Ⅰ待降節の前夜には旧寝室を飾付け、私たちが用意していたちょっとした贈物を交換したものです。私たちの空想力には限界がありませんでした。新寝室には誰も入室出来ませんでした。夕食後に私たち全員は地下室に集合して、点火した蝋燭を持って一列になり、待降節の歌を歌いながら、寮舎全部を回って、各々の寝室に戻り、それから、そこで御祝いをしたのです。日曜日には教会で祝祭礼拝をしたのです。教会には樅（もみ）の小枝の飾りしかありませんでした。祭壇の前には燃えている蝋燭（ろうそく）を付けた待降節の木がありました。祭壇の左右にある聖具室の扉から堅信の儀を受ける人たちが白い衣服を身に付けて出て来て、両手に蝋燭を持って、その蝋燭を待降節の木に付けました。そこから彼女たちは教会に長椅子に来て、各長椅子に設置されている蝋燭立に蝋燭を立てました。最後列の長椅子から光は上方に達しました。その様にして教会全体が徐々に明るくなっていきました。祭壇の上方には大きな横断幕が掲げられ、「闇の中の国民は大きな光を見る。」と書かれていました。私たちの校長でもあったキューネ牧師の説教はいつも非常に感銘の深いものでした。

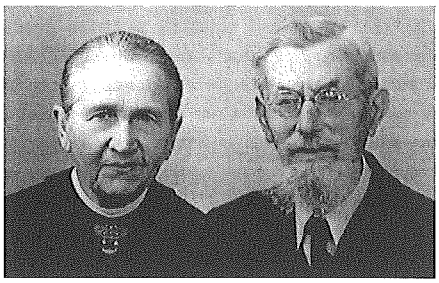

図 4. その頃の祖父母

クリスマスは、一度だけハルバーシュタットに住んでいた両親の親戚（夫は父の従兄弟で、妻は母の従姉妹）で過ごした他は、いつもハノーファーの祖父母のところで過ごしました。

私はヘルマンスヴェーダーで堅信礼の施しも受けました。その儀式には祖父母とエリー・トレおばさんが来てくれました。私が堅信礼の施しを受けた頃にはナチスが私たちの牧師たちにの代わりにドイツ・キリスト派の牧師を用いようとしました。キューネ牧師が説教をする事はもはや許されませんでした。それで、私たちは、キューネ牧師が堅信礼を施す事は許されないのではないかと、心配していたのです。しかし、そうではなかったのです。キューネ牧師はナチスに迫害されていた告白教会派の牧師でした。告白派の人たちはキリストがユダヤ人だと認識していましたが、ドイツ・キリスト派はキリストをアーリア人にしてしまっていたのです。

ヘルマンスヴェーダーを終えた後に、1936 年の復活祭にハノファーの一時的に家政を習う料理学校に通いました。同年の 8 月に私が以前習ったハナザーン先生とシベリアを経由して漢口に帰れる様にです。料理学校ではダンスの時間もありました。オペラも初めてみました。よりによってパルジファル[6]でした。幾つかの演劇も見ました。

ハナザーン先生との旅は順調に進みました。私たちは奉天に逗留しました。この機会を利用して唯一の北京訪問を致しました。2日間滞在して天壇や新年の祭壇を見物しました。それ以上の見物は無理でした。

鉄道で漢口へ向かいました。この度は丁度14日の旅でした。ついにまた我家に帰ったのです。漢口で私は楽しい暮らしをしました。漢口での私の唯一の任務は弟のヨッヘンが宿題をやっているかどうかを監督する事でした。その際、しばしば、弟はトイレに行くなどと言って消えてしまい、二度と帰って来ませんでした。彼は支那人の友達のところに消えたのでした。

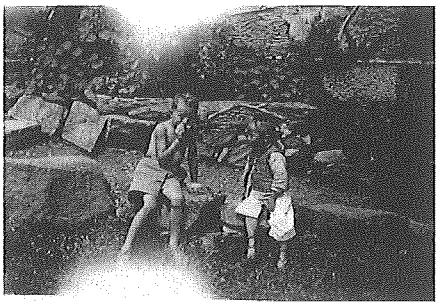

図5. 弟のヨッヘンと支那人の友

その頃は毎朝両親と一緒に乗馬に行きました。父は私に、鞍（くら）に留まる方法を丁寧に教えてくれました。後には乗馬学校を営んでいたロシア人将校に乗馬術を習いました。

父が私に小型の馬を贈ってくれましたので、私が望むだけ乗馬術を習う事が出来たのです。まず最初に、鞍なしで乗馬し、跳躍しなければなりませんでした。それは立派な乗馬学校でした。1937年には、エリザベス2世女王の父君である、ジョージ6世の戴冠式がありました。私たちはその祝典に参加しました。新しい夜会服も手に入れました。香港上海銀行の建物から英国砲艦への展望を私は絶対に忘れません。それは照明されていて、切断された氷の様でした。そして夜には倶楽部で大舞踏会が開催されました。1936～1937年の冬には私たち、つまり、母と妹のエーファと私はホッケーをしました。

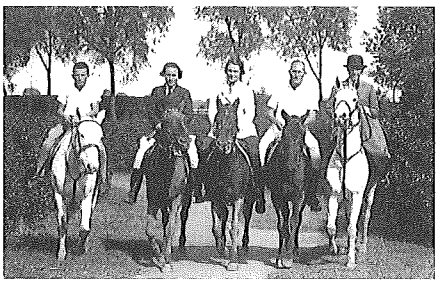

図6. その頃のリーザー家の乗馬姿

大晦日には競馬倶楽部で大々的な仮装パーティーが開かれました。

冬にはキツネ狩りもありました。それから、刈入の済んだ田畑で早駆をしたのです。

日曜日には狩猟はありませんでしたが、いつも大きな遠乗りが開催されました。そして月曜日は馬の休日でした。人々は狩猟や遠乗の後に大抵は倶楽部で一杯やったのです。

最初の頃に私は言及したのですが、支那人は人間の糞尿（ふんにょう）を集めて肥料にします。田舎には、かなり大きな肥壺（こえつぼ）がありましたが、草が茂っていて直ぐには見えません。ある狩猟会の際に、1人の英国人に不幸が起きたのです。乗馬もろとも肥壺にはまってしまったのです。彼と乗馬は臭いが消える様に何回も入浴洗馬を繰返さねばなりませんでした。そして、同情して彼を自分の自動車に乗せて家まで送届けた人は、自動車の内部を貼りかえねばなりませんでした。この人が如何に勇気を持っていたかを思わねばなりません。

復活祭等の祝日の日々には何度か、乗馬の後で、倶楽部で朝食を取りました。その朝食

はちょっと特別のものでした。

御茶の会でダンスもするのは殆ど毎週でした。男性が夕食に招くのが普通でした。勿論夜会服とタキシードを着てです。そして、その後に映画に行きました。文化的にいえば、映画以外には何もなかったのです。英国人のアマチュアー劇団もありました。時々戯曲を上演しましたが、私は一度も見た事はありません。

1937年の夏にはまた牯嶺（クーリン）・廬林（ルーリン）に行きました。私たちは、それが最後の滞在になるとは思いもしませんでした。

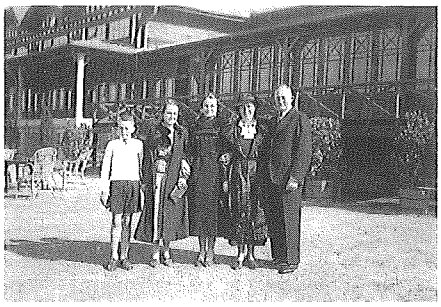

図7. その頃のリーザー家

いつもの様に素晴らしい滞在でした。今回、母は料理人のシャンを連れて来ませんでした。と言うのは妹のエーファと私が家政を実行に移さなければなりませんでしたので。私は料理学校で習った事を示さねばなりませんでした。エーファは料理を学ばなければならなかったのです。しかし彼女は、大抵、料理に関心がありませんでした。テニスの約束をする方が好きで、「あっ、リーザ、それ、もうやってしまったの？」と言うのでした。私は料理をするのが好きでした。

一度弟のヨッヘンと一緒に鱒（ます）釣りに行きました。私たちは普段は10匹は釣れるのです。今回はたった1匹しか釣れなかった振りをして、この1匹の鱒を母に見せました。母はショックを受けました。歓声を上げて残りの9匹を食卓の上に置きました。私たちみんなは鱒料理に舌鼓を打ったのです。夏にはまたヤマアラシが庭に来て、ジャガイモに舌鼓（したつづみ）を打ちます。父は、ヤマアラシが射程に入れる様に、懐中電灯を点けて銃を発射しました。それは大騒ぎでした。ヤマアラシは食べられませんが、私は40cmの長さのヤマアラシの針をまだ持っているのです。

今回、私たちは輿（こし）に担がれる代わりに徒歩で山を下りました。3000の階段を降りた後は私たちの膝は震えていました。にもかかわらず、私たちはこの山下りを満喫したのです。夕刻に船は九江を出て朝には漢口に到着したのです。妹のエーファには漢口ドイツ人学校は終わっていましたし、弟のヨッヘンにはドイツの学校へ行く時期が迫っていました。その間に日本人が上海を占領していた[7]ので、大学入学資格（アビッーア）を得られる上海ドイツ人学校へ送り出したくはなかったのです。両親は母が私たちを連れてドイツへ行くと言う事でした。しかし、それは簡単なことではありませんでした。と言うのは、支那人は南京の近くで封鎖しており、容器にセメントを詰めて揚子江に沈めていたからです。汽船は南京までしか航行出来ず乗客は荷物を持ってそこで下船して、障害物の反対側に停泊していて上海に向かう汽船に乗換えなければなりませんでした。しかし、母はそんな事をしたくはありませんでした。11月のある日の午後に父は家に帰り言いました。「18時までに荷造り出来れば上海にまで行くある人がお前たちを連れて行ってくれる。お前たちはまず香港まで飛行機

で行って、そこから、私がお前たちの予約を入れた、汽船のモンテ・ヴェルディ号[8]で上海まで行ける。私たちは勿論熱に浮かされた様になって荷造りしたのです。それから、荷物が上海に到着するだろうという情報が入ったので、ユンカースJU52型機で長沙を経由して香港に飛んだのです。香港ではスタンレイ・ビーチのある家に宿泊しました。その家はドイツ大使館が上海からの避難民の為に借り上げていたものでした。その家は簡素なもので部屋には野戦ベッドと洋服立てしかありませんでした。しかし、それでも良かったのです。さもなければ、香港は避難民で満ち溢れていましたので、宿舎を見付けるのは不可能だったのです。それに加えて、宿泊費は安く、食事も良かったからです。宿舎から10分で海浜に行く事が出来ました。香港でも水泳シーズンは既に終わってはいたのですが。妹のエーファと弟のヨッヘンは海浜を充分に楽しみました。その間に私は母が、いつ我々の汽船が来航するのかを確かめる為に、街に行く御供をしなければなりませんでした。コンテ・ヴェルディ号が港に停泊すると、私たちは船の中全部で私たちの荷物を捜しましたが、見つかりませんでした。荷物は搭載されていなかったのです。母はコンテ・ヴェルディ号への乗船を拒否して、コンテ・ビアンカマーノ号に予約を入れました。私たちは運が良い事にまだスタンレイに留まっていました。コンテ・ビアンカマーノ号の船待ちをしている日々に、私たちは香港在住の友人たちや知人たちに招待されたのです。何かの予防注射を受ける為に、私たちはピークの上に所在していた病院に行かねばなりませんでした。14日後にコンテ・ビアンカマーノ号が到着した時、私たちは乗船する前にまず、私たちの荷物が搭載されているのかどうかを確認しなければなりませんでした。私の記憶が正しければ、母の弟のリヒャルト叔父さんも乗船していました。しかし、叔父さんは上海で乗船したに違いありません。

香港からシンガポール、ボンベイ、コロンボ、マッサナ、紅海、スエズ、スエズ運河、ポートサイド、地中海を経由してジェノバに到着しました。マッサナを除いては総ての寄港地が当時は英領でしたので、私たちは上陸できました。シンガポールではジョホールのスルタンの宮殿とタイガー・バーン・ハウスを訪問しました。ボンベイでは、インドの門と言う名の門のアーチを見物しました。バザールを訪れ、素晴らしいサリーに感嘆しました。興味深かったのは、勿論、街路の雑踏でした。コロンボ港には巡洋艦エムデン号[9]が停泊していました。エムデン号は上海に居たのですが、私たちには残念だったのですが、揚子江はその時にはまだ開かれてはいたのですが、南京にまでしか遡上できなかったのです。日本人が上海を占領する前だったのです。コロンボでは海岸からラヴィニア山まで行ったのです。キャンディに行くには時間が足りなかったのです。

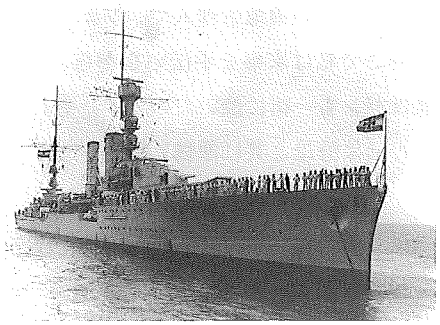

図8. ドイツ海軍の軽巡洋艦２代目エムデン号

1923年にも私たちはラヴィニア山に行ったのですが、そこで妹のエーファが殆ど溺死しそうになったのです。何故にそうなったのか、私は知りません。

停泊地の私たちの船に帰る途中、母は私たちのボートをエムデン号に横付けさせて、艦内を見物出来ないかどうか尋ねまして、許可されました。水兵たちは丁度真鍮を磨いているところでした。真鍮板1枚1枚ネジを外して磨き、その後にまたネジを止めていました。その事に私は多大な感銘を受けました。

私たちはツーリスト・クラスで旅しましたので、甲板の広さは大きくはありませんでしたが、素晴らしい食事を満喫しました。朝食には5種類の卵料理を選べました。食事ごとに新鮮なパンが出ました。弟のヨッヘンがメニューから選ぼうとしたのですが、スパゲッティがありませんでした。すると、給仕が乗組員の食堂から運んでくれました。

マッサナでは下船できませんでした。コレラが流行っている香港から来たからだとの事でした。1組の乗客のみが下船できました。とてつもないほど暑かったのです。しかし、その後、紅海では凍えてしまいました。そんな事は思いもよらなかったのですが。

ジェノアの他にナポリにも寄港しました。ポンペイを訪れる時間はありませんでしたが、墓地を訪れる事が出来て壁龕墓を初めて見ました。

ジェノアからアイロロを経由して汽車でチューリッヒに行って滞在しました。母がそこで為替を現金化しなければならなかったからです。ハノーファーに向かう途中でハルバーシュタットに寄って親戚のペーのところに少し滞在しました。クリスマスはヴァイセンフェルスのティッシャースさんのところで過ごしました。今回はモーヴィンケル一家とも知合いになれました。イルマ叔母さんは母のもっとも古い友達でした。母と叔母さんは小学校に入学した際の同級生だったのです。叔母さんの父親は主任林務官でしたが、林業にも従事していたのです。

私は乳児保育専門の看護婦になろうと決心しました。しかし、その課程は1938年4月1日にヴァイマールで始まります。それまでの時間を利用して、ヘルマンスヴェーダー寄宿学校時代の友人の両親に、自分たちのところに来て、彼女を私と同じ道に進ませる様にしてくれないかと尋ねられのです。私は6週間も招待されました。友人の父親はハルデンベルク伯爵の領地管理人で、フュルステンヴァルデの近くの土地を管理していました。

そこで私は家事を手伝いながら、とりわけ、友人を同じ道に進む様に仕向けたのです。私はパンも一緒に焼いたのです。それは私の初めての経験でした。パンの生地は夜のうちに捏桶に酵母と共に準備しておきました。翌朝早くそれをこねて、パンの形にしたのです。熱が加えられた後で石の竈で焼きました。大量のパンを焼いたのです。伯爵家の家政を処理していたからです。屠殺についても同様でした。

1938年4月1日、私はヴァイマールのフェオドーラ学園で私の教育を受け始めました。しかし、私は馴染む事が出来ませんでした。エアフルトの近くの父の友人の家で母と会った時に、母に気付かれたのです。母は弟のヨッヘンを寄宿学校のヘルマン・リーツ学校に

入学させる為にそこに来ていたのです。その結果、母は妹のエーファがモーヴィンケル家に下宿して通学していたハノーファーの学校に私を受入れて貰えないかと問合せました。6週間後に私はハノーファーのツェツィーリエ学園に転校しました。私もモーヴィンケル家に下宿しました。弟のヨッヘンも休暇の際にはモーヴィンケル家に来ました。ツェツィーリエ学園に私は直ぐに溶け込めました。私は街の中を自転車で20分ほどかけて通ったのです。学業には興味を持てました。夏には5時15分に起床し、丁度6時に学業を開始しました。午後1時ごろ昼食の為に家に戻りました。15：00から19：30までは学業でした。その後、週に2回は校長から授業を受けました。21時前に家に帰る事はありませんでした。1日の長かった事！私たちは時々さらに映画にも行きましが、翌朝は何時もどおりでした。冬には4時45分に起床せねばなりませんでした。雪が多い時は自転車ではなく5時15分発の市街電車に乗る為にです。市街電車は良く遅れて、乗換電車に乗れず、残りの道程（みちのり）を徒歩で行かねばなりませんでした。1年後には志願者は婦人科病院で6週間の実習をする事が出来ました。そこで私は11人の婦人の御世話をしたのです。実習期間は病院に住込まねばなりませんでした。授乳時間には私たちは赤ん坊たちを授乳室から連出して、パンの塊の様に担架の上に並べて、母親たちのところに戻さねばなりませんでした。私が初めて分娩を見たのも実習期間にです。その分娩は双子の帝王切開でした。母親は私のところに横たわっていました。私は普通の分娩も見ました。分娩はいつも大きな奇跡の様に思えました。40人の赤ん坊がいた授乳室の担当とされました。

その年に感染防止の実習もしました。それは市立病院の猩紅熱病棟で6週間やりました。そこで初めて輸血を見たのです。

モーヴィンケル家のイルマ叔母さんとハンス叔父さんには子供がいませんでしたので、私たちにとって両親みたいでした。私たちはその家で非常に心地よく感じたのです。

1939年の8月末に動員を体験したのです。私たち若い者には、ヒトラーの政策がどの様に進展するのか、全く分からなくなったのです。ハンス叔父さんは既に8月26日に応召しなければなりませんでした。同じ家屋の1階下に住んでいた歯科医は夜間に応召したのです。対ポーランド戦争は9月2日（？）[10]に始まりました。ツェツィーリエ学園からは兵士を乗せて前線に向かう汽車が通り過ぎて行くのが見えました。同時に、夜には灯火管制が始まったのです。食料の配給切符も出ました。総て準備されていたのです。1939年から1940年にかけての冬は寒さが特別に厳しかったのです。氷点下25℃になると総ての運河が凍結し石炭の輸送が不可能となりました。貨物自動車は総て軍隊に挑発されてしまいました。それでツェツィーリエ学園もある日に暖房なしとなりました。自転車や自動車で外出するときは細い切り口を入れた黒い遮光板でランプを覆わねばなりませんでした。その乏しい光で方向を見なければなりませんでした。また街灯も同じ事となり、小さな円形の光が地面を照らすのみでした。歩行者も夜光バッジを付けて衝突されない様にしなければなりませんでした。モーヴィンケル家も1室だけしか暖房できませんでした。練炭の

配給が足らなかったからです。台所はいつも暖かかったです。イルマ叔母さんには褐炭炉があって、昼も夜も燃やしていたからです。褐炭炉は金属の箱で、下側に引出があり、いつも熱を出していました。その上に二つの網があり、その上に食物が来たのです。以前は竈(かまど)の上で煮沸されたのですが。寒い日々にはいつも衣服を着たり脱いだりして調節しました。と言うのは、寝室の温度は氷点下でした。私たちの寝室には旧式の洗面台と洗面器と水入れがあったのです。水面に氷の層が出来ているのを見てからは、それを台所に移動して洗面しました。夏には昼休みを利用して頻繁にイーメ湖に水泳に行きました。ある日、私は水泳監督者に頼んで時計を見て貰いました。2時間泳ぎたかったからです。ちゃんとやれました。学業が無ければ後1時間は泳げた事でしょう。

モーヴィンケル家の家屋には庭園が付属していました。ハンス叔父さんは非常に熱心にその庭園の手入をしていました。彼が特別に誇りとしていたのはダリアでした。そのダリアはとても素晴らしいものでした。

弟のヨッヘンは休暇があると、いつも寄宿寮からここに来ていました。1940年には彼の堅信礼がハノーファーで行われました。これが、ヨッヘンに会った最後です。彼は15歳だったのです。

1940年の3月には第2回目の国家試験がありました。私はそれに優で合格したのです。私は殆ど理解できませんでしたので、非常に苦労したのです。と言うのは履歴書や他の学業を総てドイツ文字で記入しなければなりませんでした。私はドイツ文字に全然慣れていなかったからです。履歴書は4回書き直しました。いつもローマ字が混ざってしまったからです。

そこで支那に帰る旅の準備をしました。妹のエーファが商業学校を卒業して、父の事務所の手助けをする事になっていたからです。私は彼女に同行するのです。私は1年経ったらまたドイツに戻るつもりでした。もっと教育を受ける為にです。手術看護婦や助産婦の仕事に魅力を感じたからです。しかし独ソ戦が始まったのでドイツには帰れませんでした。最初に労働奉仕をしなければならないのかどうかを、問合せました。私たちは在外居住のドイツ人でしたので、労働奉仕は適用されませんでした。父が漢口で先を見越して新しい旅券の発行を受けていたからです。と言うのは、私のハノーファーで発行された旅券では、私は国内在住ドイツ人とされ、出国は許されなかったであろうからです。その様にして問題が解決されたので旅の支度ができたのです。満洲の通過査証と支那への入国査証を日本人から受ける為にハンブルクに行かねばなりませんでした。そこには対応する諸領事館があったからです。同時にそこでドイツからの出国許可を取りました。偶然にもその許可をも得なければならぬ事を知ったからです。そして、シベリア横断旅行許可の査証を取る為に、ベルリンのロシア人のところへ旅券を持って行きました。ポーランドでの戦争が始まっていたので、ワルシャワ経由で鉄道旅行するのは不可能でしたから、モスクワまでは飛行機で行こうしたのです。私たちはベルリンへ行って、母の友人のエリー・トレのとこ

ろで2、3日を楽しみました。そこにハノーファーの旅行社から電話があり、モスクワでは飛行場が水に浸かっているので、飛行機ではいけないとの報せがありました。結局、鉄道で行くしかなかったのです。4月の終りにトレ家の人たちはベルリン・ツォー駅に連れて行ってくれました。そこから真夜中にケーニヒスベルクへ向けて発車したのです。

(註)

1　割箸

2　ナチスの時代にゲッベルス宣伝相が中心になって普及させたラジオ。演説などを流した。

3　マッケンゼン元帥、1849.12.6～1945.11.8、は第1次世界大戦の英雄で旧プロイセン軍部とナチスを結びつけた。従って、50歳の誕生日と言うのは間違い。

4　シェークスピアの戯曲。

5　維新の日とも言う。ヒトラーが首相に就任した1933年1月30日から間も無い3月5日にドイツ帝国議会総選挙が行われた。その議会の召集をビスマルクにより統一されドイツ帝国の第1回議会召集日の1871年3月21日にちなんで、ヒトラーは1933年3月21日ポツダムで開会式を行なった。元ドイツ・プロイセン皇太子も出席し、旧プロイセンを代表するヒンデンブルク大統領と新興ナチスを代表するヒトラー首相が握手し新旧勢力の協調を示威した。

6　リヒアルト・ワーグナーのオペラ作品、非常に長い曲で子供には向かない。

7　1937年7月7日に北京郊外で盧溝橋事件が起き、8月には上海に波及し、支那事変と言う名の全面戦争になった。

8　コンテ・ヴェルディ号の間違。コンテとはイタリア語で伯爵と言う意味。

9　第1次大戦中にインド洋で通商破壊戦を行い撃沈された巡洋艦エムデンの名を付け、1925年に就役したドイツ海軍の軽巡洋艦。

10　1939年9月1日ドイツはポーランドに侵攻し、第2次世界大戦は始まった。

Die Geschichte von Lisa Fritsch (2)

Hajimu WATANABE
Graduate School of Science and the Humanities
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, 712-8505, Okayama, Japan
(Received October 1, 2011)

Lisa Fritsch wurde 1920 in Hankou, China geboren. 1932 besuchte sie das Internat in Herrmansweder bei Potsdam. Sie erlebte dort die Machtübernahme Adolf Hitlers, sah Reichspräsident Generalfeldmarschall von Hindenburg an dem Tag von Potsdam und etwas später auch Hitler, Göring und Göbbels auf dem Balkon der alten Reichskanzlei in Berlin.

1936 kam sie nach Hankou zu ihren Eltern zurück, doch im nächsten Jahr begann der Krieg zwischen Japan und China. Sie flüchtete nach Deutschland zurück. Zwei Jahre später begann der Zweite Weltkrieg, auch das Leben in Deutschland veränderte sich komplett. Sie versuchte über Siberien wieder nach Hankou, China zu ihren Eltern zurückzukommen.